
王国物語

三沢緋夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王国物語

【Nコード】

N5126A

【作者名】

三沢緋夏

【あらすじ】

さあ旅に出よう。大切な仲間と一緒に、破滅をもたらすモノを倒すために！

第0章〜プロローグ〜（前書き）

決して不良とかヤンキーとかの話じゃないです。

第0章　プロローグ

和国。

春になれば桜の花が満開に開き、小鳥が鈴のような声で囀る国。

夏になれば強い光が大地に刺さり、蝉時雨が懐かしく聞こえる国。

秋になると山の木々は綺麗に色づき、コロコロと虫が囀る国。

冬になると白い雪が空を舞い、キシッと雪の上を歩く音がする国。

和国ってそんなところ。

ある世界の、ある惑星の、ある国にも似ていると噂されるが、この国なのかは誰も知らない。その国には法律があるらしいがそんなものこの国、いや世界にはない。聞いたこともない。
和国ってそんなところ。

それはともかく。

この状況は何だろう。

「最近調子こいてるのはてめえかコラ」

屈強なヤンキー数人が、コンビ二の裏で俺を囲んでいる。モヒカンだったりリーゼントだったりそのいつらの手にはスタンガンだとか竹刀だとか木刀だとかナイフだとか。

そんで俺の手には缶ビールの入ったコンビ二の袋。

「ちいっとばっかし俺よりいい顔だからってデカイ顔してんじゃねえぞ」

この世の終わりを迎えたときに悪魔が見せるような顔してるやつにちいっとばっかしだと言われたくはない。そして俺の顔はおぼんみたいに丸くてデカイお前の顔よりは小さい。

「何とか言えよゴルア」

その c h 用語は何だよ。ゴルアはねえだろゴルアは。

黙ったままの俺が気に食わないのか知らないが、屈強なヤンキーたちはそれぞれで目を見合わせると、円の中心にいる俺に四方八方から突っ込んできた。

「死ねえええっ!!」

右足を軸足にして左にターン。そのまま突っ込んでくるヤンキーの1人のこめかみに思いつきりデコピンをする。

「ぎによえあああっ」

奇声をあげながらそいつは地面に転がる。それに気をとられた木刀を持っていた男の手を、左のつま先で蹴っ飛ばす。はずみで落とした木刀を手に、俺は跳んだ。

俺は昔からジャンプ力が凄いと言われる。普通にそのへんにある15Mの塀なら簡単に飛び越えられる。当たり前だが手を使って。とにかく跳躍力なら誰にも負けない。

それは俺の自慢にもなるし、こういうときは便利だ。

たとえばホラ。

木刀を片手に跳んだ俺に、ほかのヤンキーたちは一瞬怯んだ。

一瞬でいい。一瞬怯めばこっちのモンだ。

そのまま後ろ斜め45度。俺は勢いをつけて思いつきり木刀を投げた。

それは宙を一直線に突き進み、やがてゴズツという鈍い音を出してから地面に落ちた。

ゴズツという鈍い音は、ナイフを持っていたヤンキーの顎と木刀とがぶつかる音だった。

俺が着地すると同時に、先のヤンキーは血を流して倒れる。

「う、うわあああああ」

恐怖に満ちたほかのヤンキーの悲鳴があたりを包み込む。

・・・耳障りだ。

血のついた木刀を拾って、俺は再び構えた。
と、そのときだった。

「こらーっ！営業妨害だ畜生どもが　　っ！」

コンビニの店長らしき男が怒鳴りながら乱入してきた。その右手には黒光りする拳銃。

「・・・こりややべっかな」

構えていた体制を逃げる体制に変えて、俺は木刀を投げ捨てた。カランカランと、地面に落ちるその音を背に、俺は家の方向に向かって走り出した。

「あつ畜生。てめえせめて名乗ってからいけっ」

倒れたヤンキーをかつぎながらほかのヤンキーどもが叫ぶ。
そいつらを見ずに。

聞こえるか聞こえないかの声で。

にやっとなんて笑って俺は答えた。

「白井良太しらいちろうってんだ。覚えとけ」

後ろから銃のなる音がしたけどそんなこと俺は知らない。

朧月が闇夜を照らした。

第0章「プロローグ」（後書き）

王国物語プロローグ、どうでしたか？

この話はワードで作っているものをもっと詳しくしたものです。

ぶっちゃけ長いです。

それでも興味をもたれた方は、どうぞ最後までお付き合いください。
あなたさえよければまた。三沢でした。

第1章ゝ住処ゝ（前書き）

20歳未満の飲酒は法律で禁止されています。

第1章　住処

あけた瞬間泡が飛び出る可能性100%。

そんな缶ビールを意を決してあけて、予想通り吹き出た泡を処理して口を含む。

1人では少し広いこの部屋に住み着いてからもう3年半だ。

親父と母さんと姉貴1人を飛行機墜落事故で失ってからもう3年たつ。月日が流れるのは早いな。と年寄りくさいことも思ってみたりする。

16歳だった。

あのころは何かと気に食わないことばっかで。

1人で部屋借りて。

もう1人の姉貴、曙姉あけみはデザイナーになるために寮に入って。

そんな俺らに会いに来る途中で。

パイロットの操作ミスで。

何百人もの死者の出る事故で。

家族をいっぺんに3人も失った。

そうして3年たって。

居心地の悪かったこの部屋にもだいが慣れた。今じゃ毎日喧嘩三昧だ。

「ピンポン」

夜中の2時過ぎにもかかわらず鳴り響いたドアベル。何故かこのアパートのドアベルは音が大きくて近所迷惑もいいところだ。

まあ、大して人がいるわけでもないが。

ビールを置いて、ドアをそろりと開ける。

「りょーたつ。あつそぼ」

「水色……」
みずいろ

空色の髪を長く後ろに垂らして、瞳は輝くエメラルド。それはぱっかりあいた穴のようで、今は嬉しそうに細められている。

身体はしっかりしているがマッチョ……ってほどでもない。

そして最大の特徴は家柄だ。

佐倉グループの1人息子であるため金はもちろん権力も凄い。本人に後を継ぐつもりはないらしいが。

太い、力強い腕に白くて細い腕をからめているのは彼の配偶者であり町を歩けば誰もが振り返るほどの美貌をもつ鈴音だ。
りんね

光に照らされた大地の色の髪を耳の横で1つにまとめている。

黒いまつ毛は扇のようで、その瞳は灰緑のビー玉だ。

秋に実る果実のように赤く、マシユマロのようにふくらした唇の両端を上にあげている。

「つつーかお前らさあ、時間帯考えろつつーの」

彼らの脳内辞書に遠慮とか配慮とかそういう言葉がないのは知っているがいくらなんでも常識ぐらいはあってもいいだろうに。水色はともかく鈴音ぐらいには。

「だってこの時間じゃなきや遊べないじゃん。今から夏澄^{かすみ}たちも誘いにいくんだ。良太もくるでしょ？」

くるでしょくるよなっていうかこないとてめえ権力使って殺すぞコラのオーラがにやかな水色の顔からうかがえる。

俺はため息をついて家を出た。

空には銀の数多の星。

第1章ゝ住処ゝ（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

今回は主要キャラ紹介前編ってことで・・・

次回は残り2人の紹介とある事件が。

あなたさえよければまた。三沢でした。

第2章へ歩へ（前書き）

今章まで紹介となります。

第2章　歩く

深夜の古ぼけた商店街は、人どころか灯りすらもない。
真つ暗の中を、月明かりだけで俺と水色たち計5人は並んで歩く。

数分前

「お前らなあ・・・今何時だと思ってんだよ」

光と草原の草を混ぜて色をつけたような草色の髪を1つにまとめて後ろにたらしめている佐祐^{さすけ}は、腕を組んで笑みを浮かべた。

笑みを浮かべているがそれは嬉しい、という感情とは別ものようだ。その証拠に額にはうつすら浮かび上がっている青筋。

髪と同じ色の瞳には、にこにこ笑っている水色と鈴音と苦笑いを浮かべている俺の姿が映っている。

「もー良ちゃんと同じこと言う　っ！！」

頬を膨らませて鈴音が佐祐を上目でにらむ。それを見下ろすように佐祐も鈴音を見る。

こんなことを考えている場合じゃないとも思うが、この2人が一緒にいるとそこだけ神秘のベールに包まれているような感じがする。

鈴音同様佐祐も綺麗な容姿をしているし、長い髪の手入れは欠かさない。今はため息を出しているその口から発せられる声は、低くよく通る澄んだ声だ。

「ってか常識つてもんをなあ・・・」

「何やってんのよあんたら・・・」

ふいに佐祐の後ろから佐祐のより若干高い声が響いた。

「あ、夏澄^{かすみ}ちゃんやつほー。あつそぼー」

闇夜に映えるオレンジ色の髪を佐祐のより高く結い、灰空色の目は

今は呆れ顔をつくっている。

親父たちが死んだ原因である飛行機墜落事故の唯一の生還者であり、野生そのものの生活をしていたこともある。

殺人屋をしていたこともあって、俺らの中で一番黒い過去をもっている奴だ。

「遊ぶって・・・どこで」

「いつもとこーっ！」

鈴音と水色が声をそろえて言う。それを制するように口元に人差し指を持っていつて、夏澄は靴を履いた。

「別にいいけど。どうせ暇してたとこだし」

佐祐はどうする？と夏澄が佐祐を見上げる。佐祐は少しだけ口を尖らせてから、目をそらせて言った。

「・・・夏澄がいくんなら俺も行く」

というわけで今に至っている。

鈴音は水色とひつついてバカッフル発揮してるし、佐祐は夏澄にひつついて離れない。

・・・俺だけ1人ものではないですか。

深夜なので誰も口を開かずに歩くから、風の音が耳に心地よく響く。不ぞろいに聞こえる5人分の足音。

時々雲で月が隠れるたびに

一瞬だけの闇夜が生まれる。

第2章へ歩く（後書き）

次章から話が大きく動き出します。

小分けにしてしまつてすいません。次章から気をつけます。

ここまで読んでくださつてありがとうございます。よろしければ次章もお付き合いください。

あなたさえよければまた。三沢でした。

第3章くやつちまえく

ねえ良太。

5月18日は良太と私の誕生日だね。

誕生日が一緒。

なんだか、運命みたいだと思わない？

いつものところ。まあただの広場なんだが、大通りから外れているため争いとか喧嘩とかがよくある、俺たち5人のお気に入り場所だ。

水色と鈴音が足を曲げたり伸ばしたりしている。夏澄が背中中の剣を手にして1度振る。佐祐が長く伸びた髪を結いなおす。俺はばきつと指を鳴らした。

そして5人そろって広場の中心を見据える。

非常識な時間に、少女が1人。

そして周りにはそろいの黒服を着た数十人の男。よく見れば女も2人ほど混ざっている。

手には武器として使われるものおそれぞれで持っていて、少しずつ。だが確実に少女のほうに詰め寄っていく。

突然夏澄が 行こう とだけ残して走り出した。

「夏澄ちゃん！」

あわてて鈴音が後を追う。その後を俺たちも追った。

月が雲で隠れて一瞬だけの闇夜がうまれる。

地面に手について大きく身体を反らせる。そしてそのままの勢いで

夏澄は一度に数人の男を蹴っ飛ばす。

「な……」

突然の攻撃に動きを一瞬止めた男を水色が殴り倒す。

佐祐が腰に手を伸ばし、挿していた剣を引き抜き、軽く振る。

鉄色の刃が月に照らされて鈍く光る。そしてその後を追うように舞う鮮血。

その後ろで鈴音が笑う。

「だ、誰だっ!!」

オールバックの男が叫ぶ。額にはうつすら赤いモノ。手には握り締めた護身用つばい警棒。

威勢良く叫んだわりには声がひっくり返っている。かすかに身体も震えている。

そりゃそうだろう。

いきなり突っ込んだかと思えば仲間を殴るし蹴るし斬るしそれ見て笑うしじゃあ。

俺だって泣きたくなるだろうよ。

泣いてないだけ彼は凄い。

でも俺が同情する間もなく、佐祐が冷たく言い放つ。

「誰だっっていーだろーが」

それが合図だった。

向こうの奴らが反撃をはじめた。

どこにそんなにいたのか、人数はどんどんどんどん増えていく。

夏澄が斬る。

水色が蹴っ飛ばす。

佐祐が刻む。

どんなに倒してもどうしてだか数が減らない。

逆に増えているみたいだ。

「っあーもキリがねえっ」

水色が苛立ちの声をあげる。

3人ともどんだん息があがる。

それを見ながら、鈴音が俺のほうを見てくすりと笑った。

「良ちゃんはやんないの？」

やんないの？ああ、あんたは喧嘩しないのか？ってことか。いやだ
ってほら・・・面倒くさいし。

だがそういうわけにもいかないようだった。

ぼーっと見ているだけの俺に向かって佐祐が叫んだ。

「っおい良太てめっ何一人だけ楽しんでんだバカ」

それに続くように夏澄も叫ぶ。

「そーだよバカ」

そして水色はこう叫ぶ。

「バーカ」

「そろってバカバカ言うなっ！」

そう叫んでから、俺は相手が密集している方向に向かって右手を突き出した。

身体の中から全身をめぐらせるように気を落ち着かせる。

そしてそれを右手だけに集結。

頭に浮かぶのはこの言葉。

「バンっ」

右手を光源に全身が青白く光る。髪がわずかに浮いた。右手の平には赤く光る小さな魔法陣。その中心から一瞬だけの光線。

そしてその先にいた相手の密集地で突然おこった爆発。

「うわあっ」

「ぎゃあっ」

「ぐへっ」

響き渡る奇声・・・ではなく悲鳴。煙で何も見えないが。

風にのって人間の焼ける匂いがする。

煙が晴れたらたくさん人間が転がっていた。

鈴音はやっぱりくすくす笑う。

第3章　やつちまえ（後書き）

「バン」と「ビックバン」と迷ったけれどこんな雑魚相手に良太が「ビックバン」なんか使う分けないなーと思って「バン」にしました。

どうでもいいですね。失礼しました。

感想、評価等いただけると嬉しいです。栄養になります。貴方さえよければまた。三沢でした。

第4章　誰だっ！

ああそうだ。

あいつが俺の名を呼ぶたびに
胸が締め付けられるような
そんな気がしたんだ。

「ま・・・魔法使い・・・」

生き残っていたオールバックの男がへなへなと座り込みながらつぶやいた。

動けるのは数人だろう。だが向かってくるものはいない。
改めて魔法の力の大きさに驚く。

「ぼーっと見てるかと思えばいきなり爆破系使いやがって・・・少しは加減しろよな」

水色が舌打ちをする。

「でもだいたい数が減ったし、結果オーライでしょ」

夏澄が剣を鞘に収めながら言う。

チン、という金属音が響いた。

佐祐も剣を鞘に収めながらそれに、と続ける。

「残った奴も歯向かう気ゼロだしな」

見回して水色はうなずいた。

「ちよつとどーするよこれ」

突然甲高い声がその場に響いた。

「どーするもこーするもありませんわ。あんなにいた兵がいつきに死んでしまってるんですもの。お父様に怒られますわ」

先の声よりやや低い、優しいかんじの声が後をつなげる。

「誰・・・」

声の主を探して暗闇の中を必死で目を凝らした。
やれやれ、とため息をつきながら藪の中から出てきたのは金毛を綺麗に2つにまとめた目つきの悪い女。

そしてその後が続いて闇の中に綺麗に溶け込むような黒い髪を左右でまるめているお嬢様系の女も出てくる。

どちらも背は同じくらいで、瞳は闇によく映える藤の色。黒い服に身を包み、足取りは軽い。

「で、どーすんの？始末する？」

目つきの悪い、不良系のほうが俺たちを脅すかのように言う。

「始末したいのはやまやまですけど・・・装備が悪いですね。ここはいったん引きましょう」

「っーか誰だよてめえら」

お嬢様系の言葉のすぐ後を追うように水色が低い声で言った。

「誰でもいいーだろしゃべんな水色」

不良系が悪態をついた。

「何で俺の名前・・・」

水色が困惑したように目を泳がせる。

水色は1回も名乗っていない。なのに不良系は迷うこともなく水色の名を呼んだ。

超能力があるのか。

顔を見ただけで名前がわかるのか。

知っていたのか？

ならば何故・・・

困惑する俺たちに不良系はサラリと言った。

「あ、それ名前だったんだ。あたしは髪の色のこと言っただけだよ」
水色はずっこけた。

「で、結局お前らは何者なんだよ」

俺は水色を立たせながら2人の少女を睨んだ。

2人はどちらも口を開く様子は見られない。

「・・・答える」

それでもやはり口は開かない。

紫色の瞳で晒う。

「答えるつつてんだろ」

思わず怒鳴った俺に2人は顔を見合わせて、それからなにやらつぶやき始めた。

それは唄のようで、呪文のようで、詩のようで、ただの詞ことばのようだった。

闇夜の音のない広場で風にのせるように響く2つの旋律は耳に心地よく残る。

髪が、服が、わずかに青く光りながら浮かび上がる。

俺も、水色たちも時がとまったかのように動かない。

いや、動けないんだ。

目でその光景を見、耳でその言葉を聞くことしかできない。

そのうち2人の身体が青白い光に包まれはじめた。

闇のどこにもないのに辺りから光を集めるように、2人は光を取り込んでいく。

そして

パキンという音と一緒に

光は大きく破裂するように大きく光った。

あたし小狼^{しやおらん}

私は小鳴^{しやめい}ですわ

風が運んだように耳元で聞こえた声。

それが名前をつけた言葉だと脳が理解したのは光も消え、2人の姿も消えてからのことだった。

俺たちは立ちすくんでいた。

あれが魔法による空間移動だということはすぐにわかった。

なのにどうも納得いかない。

魔法を攻撃手段としている者にはわかる、魔力のオーラというものがあの2人からは発せられていなかった。

魔力がほとんどないのか？

だが空間魔法は中級魔法だ。魔力がほとんどないのなら使えるはずがない。

ならば考えられるのは委託だが・・・

委託はするほうが相当な魔力をもっていなければできないことだ。
俺も魔法委託をすれば3日は寝込むだろう。

首筋を冷や汗が流れた。

「おい良ちゃんたちーっ」

鈴音の声に八つと頭を上げた。

水色たちも声のほうを向く。

鈴音は大きな木下で両手を振っていた。

「女の子救出したよー」

「そうだ女の子っ！」

夏澄がはっとして鈴音のほうに向かって走り出す。俺たちもその後を続いた。

女の子は闇の色をかき集めてそのまま絹糸に塗りつけたような髪の色をしていた。

瞳は雨上がりの空色。肌は夜の中でもはっきりわかるほどの白色。だが病弱というかんじではない。

「擦り傷とかはあったけど特に目立った外傷は0だよ」

鈴音が女の子のひざにバンソウコウを貼りながら俺たちのほうを見た。

そんなことはどうでもよかった。

「あの、助けていただいてありがとうございます」

女の子は夏澄たちに向かって頭を下げる。

「いやいや、大丈夫だった？」

夏澄がそう言うと、女の子は照れたように頬を薄く染まらせ、うなずいた。

そして俺のほうを向くと、にっこり笑った。

「ありがとう、良太」

夜風がザワッと木々を鳴らした。

第4章 誰だっ！ (後書き)

嘘八百です。魔法関連については信用しないでください。

感想評価等いただければとても嬉しいです。次話へのエネルギーになります。

あなたさえよければまた。三沢でした。

第5章　丁重に扱えー！

俺と、佐祐と、まおら。

学生時代の仲良しグループ。

もう1人女子がいたような気もするが、とにかく仲がよかった。お昼を食べるのも、放課後遊ぶときも、いつも一緒だった。

俺はまおらが好きだった。

俺とまおらは好敵手でもあった。首席を争う、そんな関係でもあった。テスト前には2人で図書館に行った。だから俺はテストが好きだった。

そのうち4人でいるときもまおらというようになった。知識量が同じくらいだから、話も合った。楽しい、と。感じるが増えた。

いつだったかそういう関係になって恋人という間柄になって

数年後にまおらは突然姿を消した。

そのまおらが今日の前にいる。

「久しぶりだね」

そう言つてまおらは笑つた。

黒い、闇だけを集めて絹に染めたような髪と。夏の爽やかな空を思わせる瞳と。輝石の輝きをもつ肌と。全てがまったく変わっていなかった。

俺はただ、呆然としていた。

「え、何！？なにになになに？」

鈴音が俺の服のすそを引つ張つて言つた。

俺とまおらの微妙な空気を読み取つたのか。

それとも俺の表情が硬かつたからなのか。水色も、夏澄も、わけがわからないという表情で俺とまおらを見比べている。

ただ、佐祐だけがあちゃー、というような顔で俺を見ていた。それから、一歩前に出て口を開いた。

「良太の元カノ」

言わなくてもいい一言を・・・

そう思つたが他にどう説明すればいいのかわからなかった。

「え、良太彼女いたの！？」

と、夏澄が驚きの声をあげるし、

「へーかわいいー」

と、水色がまじまじとまおらを見るし、

「名前なんてゆーの？何歳？」

と、鈴音が俺の服のすそを離してまおらに飛びつくし。

まおらはわりとパニック気味だった。

「え、えっと・・・」

救いを求めるように、まおらは俺のほつをちらっと見た。
空色の目でこう言っている。

どうしよう、と。

俺はため息をついた。

「東山吹まおら。俺と同年」

「そんで俺らと違って繊細で壊れやすいから丁重に扱えよ」
佐祐が後付をする。

鈴音を中心に、軽い自己紹介ごっこが始まった。

第6章　話を聞こう

殺風景な部屋。

必要な家具と、隅っこにある多量の本だけしかこの部屋にはない。
見慣れた部屋。

住み慣れた部屋。

ただ、ソファにちょこんと座ってうつむいているまおらの存在だけ
が見慣れなかった。

1人でいるのは危険だから、と。

鈴音に言われて俺は仕方なくまおらを連れて帰った。

まあ俺も色々聞きたいことがあったから丁度よかったと思う。

コーヒーを渡して俺はテーブルを挟んでソファの正面にあるベッド
に座った。

そう。

聞きたいことは色々ある。

たくさんある。

ありすぎてどれから聞けばいいのかわからないが
とりあえずコレから聞くべきだろう。

．．．

「あいつら、何？」

小狼と名乗った金髪の目つき最悪不良系の女と
小鳴と名乗った黒髪のおっとりお嬢様系の女。

名前の響きからして清虚の奴らだろう。

そんな奴らがまおらを囲む理由がわからない。手には武器を持っていたから殺すつもりだったか・・・

納得いかないことは納得するまで調べる。それが俺の楽しみだ。だが待てど暮らせどまおらの口から答えは出てこない。

ただうつむいて、膝の上でぎゅっと手を握っているだけだ。

「・・・まおら？」

名前を呼んでも返事はない。

「まおら、どう」

「何でもないっ」

俺の言葉を途中で打ち切って、まおらは突然叫んだ。

何でもないから、と何度もつぶやいている。

が、その様子は尋常じゃなかった。

握った拳はぶるぶる震えていて、うつむいた額からは何粒もの汗が零れ落ちている。

うわごとのようになんでもないと繰り返しつつばやいている。

「何でもないだろ」

びくつと身体をはねさせて、まおらは探りいれるように聞いた俺の顔を一瞬だけ見た。

すぐにまたうつむいてしまったが、一瞬見たまおらの表情はさっきまでのものとは全く違った。

明らかに変だ。

絶対何かある。

だがまおらの様子から見て決して話してはくれないさそうだ。

仕方がないから俺は遠まわしに断片的に聞いていくことにした。

単刀直入に聞くのを避ければ少しでも何かしゃべってくれるかもしれない。

コーヒーを一口飲んで気を落ち着かせる。

それからまだ尋常じゃない様子を見せているまおらにコーヒーを飲むように促して、気を落ち着かせた。

一気にコーヒを飲んでから、まおらはふうつと息をつく。

「落ち着いたか？」

首を立てにふって、まおらは俺を上目で見てきた。

「あの、ごめんね」

「何が？」

何のことだかわからなくて聞き返した俺を眺めて、空の目を少し潤ませて。

唇を少しだけ噛んで、それからまおらは口を開く。

「危ない目にあわせちゃって」

一回そこで言葉を切って、それから

「ちゃんと全部説明するのが道理だね」

と付け足した。

どうやら話してくれる気になったらしい。

空になったコーヒカップをまおらから受け取って再びコーヒを
入れなおす。

それからまおらに向き直って、俺はにっこり笑った。

「嘘偽りなく、できれば全部話してね」

まおらは小さくうなずいた。

第6章　話を聞こう（後書き）

ずいぶん遅くなりましたが続きです。

それにしても短い・・・。

次回からはもう少し長くします。

感想等もらえたらうれしいです。次話製作のエネルギーになります。
あなたさえよければまた。三沢でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5126a/>

王国物語

2010年10月10日01時04分発行